

宇野千代編集の雑誌『スタイル』における初期のグラビアと 「スタイル推薦衣裳」について

A Study of Gravure Photography and Recommended Clothes in the magazine *SUTAIRU*
from the First Issue to Volume 2, Issue 1

松尾量子
MATSUO, Ryoko

In this paper, we examined the photo gravure from the first issue of the magazine *SUTAIRU* to the first issue of Volume 2. The photo gravure of the magazines in the early days of the first issue contains the direction of handling Western clothing and Japanese clothing in a competitive manner. In addition, it was confirmed that the clothes recommended by *SUTAIRU* in the opening gravure had a close relationship with the craft design at that time.

1. はじめに

宇野千代編集の雑誌『スタイル』は、1936年6月に、海外モードの傾向やライフスタイルの情報を伝えるお洒落なグラビア雑誌としてスタートした。創刊号は、海外から届いた写真を中心に構成されていたが、第2号以降は、日本人女性をモデルとして撮影した写真が掲載されるようになり、読物ページが加わるなど、号を重ねる中で、『スタイル』の編集方針が定まっていって¹⁾。巻頭にグラビアが置かれていたのは、創刊号(1936年6月号)から第2巻第1号(1937年1月号)までである。1936年6月28日に読売新聞に掲載された『スタイル』の広告には、「宇野千代編集モダングラフ」というコピーがつけられており、「流行のことなら何でもござれ、凡そ現代人の最関心事をすべてグラビアで解決するスバラシさ、小説読物の満載は勿論です²⁾とある。本稿では、創刊号から第2巻第1号までの『スタイル』について検証を行い、創刊初期の写真グラビアに、洋装と和装を拮抗した形で取り扱うという方向性が見られること、また、第1巻第4号から巻頭グラビアに掲載された「スタイル推薦衣裳」が、当時の工芸デザインと深い接点を持っていたことを確認する。資料は、臨川書店による復刻版『スタイル』(2003年)を用いた。資料の引用に際しては、原則として仮名遣いは原文のままとし、旧漢字は現在の形に改めた。また、表記の読み取りができないものについては「○」を記した。

2. 創刊初期の『スタイル』におけるグラビア写真

1) 第1巻第2号(1936年7月号)に掲載された福田勝治による2枚の写真

『スタイル』創刊号(1936年6月号)及び第1巻第2号(1936年7月号)では、巻頭グラビアにハリウッド女優の写真が用いられている。創刊号には、日本人をモデルとして撮影された写真は見当たらないが、第1巻第2号(1936年7月号)には、福田勝治(1899-1991)によって撮影された洋装と和装の写真を見ることができる。福田は、山口県出身の写真家で、『スタイル』創刊と同時期の1936年6月から『アサヒカメラ』に「カメラ診断 人物写真の分析」という、女性の写し方についてのコラムの連載を始め、そのユニークな写真撮影法によって、人気急上昇していた写真家である³⁾。

図1に示す洋装写真のモデルは、画商で美術評論家である福島繁太郎の夫人で、随筆家でもある福島慶子(1900-1983)である。この写真は、人物が切り抜かれ、岩肌を思わせる背景と組み合わせたフォトモンタージュのようである。写真に添えられたキャプションには、

さやさやと、ちょっとした身じろぎにも爽やかなきぬずれの音をたてる白の波紋絹。スカートに所々ちらした花束はピンク、薄むらさき、クリー



図1 福島慶子
(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第2号29頁)

ム等のやさしいパステルカラー風の色彩で描き出してあります。それが胸飾と揃えられて居る所にベスト・ドレスラーとしての夫人の一巴里好みの床しさが感じられます。(福田勝治氏撮影)⁴⁾

と記されている。ドレスがフランス製であるかは不明であるが、この号には、福島の「仏蘭西の避暑地」と題したエッセーが掲載されており、海外のお洒落なモードや生活が紹介されていた。

福田によるもう1枚の写真(図2)は、深川の鰻屋「宮川」の令嬢静子をモデルに撮影されている。これは、『スタイル』に掲載された最初の和装写真である。1994年に山口県立美術館において開催された展覧会の図録『写真家/福田勝治展 孤高のモダニスト』では、この写真の複写には、「深川育ちの娘さん」というタイトルがつけられていることが確認できる⁵⁾。

第2号の編集後記には、「この号には読者の要望

を大分、盛り込んだ積りである。日本ものの頁も、スポーツの頁も」とあり、宇野千代の個性と読者からの要望が相まって、和装頁がつくられたと思われる。第3号からは編輯方針を新しくして「もっと多方面の『スタイル』を取り入れて行かうと思ふ」と記されている⁶⁾。第2号33頁に掲載された社告によると、第3号から「流行」「和服」「嗜好・食器」「家具・建築」「カメラ」「スポーツ」「モーター」「音楽」「舞踏」「映画」「美術」「随筆・小説」についてのページを担当する編集者が告知されており、宇野の担当は「和服」と「随筆・小説」である。

2) 第1巻第3号(1936年8月)に掲載された芸姑の写真

第1巻第3号(1936年8月)では、巻頭グラビアに初めて、日本人女性をモデルとした写真が用いられた。モデルは、薩摩治郎八夫人千代子である。(表1)キャプションには「お客様を迎えてサロンの階段へ下り立たれた薩摩千代子夫人」⁷⁾とある。撮影者のクレジットは記載されていない。撮影は、駿河台にある薩摩治郎八の屋敷で行われた。薩摩治



図2 宮川静子
(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第2号 35頁)

郎八は、藤田嗣治らの支援者で、パリでの生活が長く、千代子はフランス版『ヴォーグ』のモデルをつとめたことがある数少ない日本人女性である。巻頭グラビアの千代子のドレスは上野広小路カナメヤで仕立てたと記されている。

第3号で特筆すべきは、「深水中に夏物を訊く」という伊東深水のインタビューに添えられた柳橋の芸姑榮美子の2枚の写真である。撮影は福田勝治で、茄子紺の破れ麻の葉模様の縮緬浴衣(図3)と源氏香模様の平絹を着た立ち姿の写真を見ることができる。福田は撮影の際に、全身の立ち姿だけではなく、自身が得意とする部分的なクローズアップを撮影したようで、『写真家/福田勝治展 孤高のモダニスト』には、茄子紺の浴衣姿の榮美子をモデルとした「柳橋ゲイシャ」「左襟」と題した図3とは別アングルの写真を確認することができる⁸⁾。

福田は、当時、人気急上昇していた写真家であり、福田の写真を起用することは、創刊初期の『ス



図3 榮美子
(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第3号 16頁)

スタイル』にとって、販路の拡大という面で大きなメリットがあったと思われる。福田によるこの2枚の写真は、大きな反響を呼んだようで、第1巻第4号の編集後記に、「先月の和服ページの日本髪姿はどこへ行つても大変な評判でした」と記されている⁹⁾。

福田は、榮美子の他、二科会の仲田菊代の夏の着物姿の写真の撮影を担当している。キャプションによると、白緋の帷子に矢の字模様の帯、帯止めはドイツの古い陶器の貨幣で白と黒の色調のやわらかさが、仲田の好みであると記されている¹⁰⁾。以後、『スタイル』には、毎号、芸姑の写真と共に、日常的に着物を着ることの少ない女性を含めた和装の写真が掲載されるようになる。

3. グラビアに掲載された「スタイル推薦衣裳」

表1は、第1巻第1号から第2巻第1号までの巻頭グラビアのモデルと撮影者等をリストアップしたものである。第1巻第3号(1936年8月号)の薩摩千代子以降、巻頭グラビアには日本人女性をモデルとした写真が掲載されている。第4号の入江たか子のみが和装¹¹⁾で、あとはすべて洋装である。第1巻第3号からは、巻頭グラビアに『スタイル』が推薦する装いが見られる。これは、「スタイル推薦衣裳」「特撮衣裳」などと銘打って掲載されているが、この中に、銀座ミラテスの広幅手織り銘仙を用いた『スタイル』オリジナルのドレスを見ることができる。

1) 『スタイル』におけるミラテスの広幅手織り銘仙を用いた推薦衣裳

①ミラテスの広幅手織り銘仙

ミラテスは、群馬県高崎の井上房一郎¹²⁾により、1933年7月に軽井沢に開店した家具工芸店で、ラテン語で「布地を見る」を意味する言葉から命名されている。井上は、1933年から1936年まで日本に滞在したドイツ人建築家ブルーノ・タウト(1880-1938)を高崎に招き、タウトは、1934年8月から1936年10月まで、高崎に滞在し、井上等と共に、伝統的な素材や技法を自由に組み合わせた新しいデザインの開発に携わった。1935年2月に開店したミラテス銀座店の看板や内装は、タウトによるもので、高崎で開発された「タウト・井上」という刻印がおされた特別な工芸品を販売する店であった。『工芸ニュース』第4巻第10号(1935年10月)には、「銀座の一

角に目新しい工芸品の、それも日本的な材料の竹、木の空、漆、めいせん等が新しい感覚に生きた美しい工芸品の店がある」と紹介されている¹³⁾。タウトが高崎に滞在中、助手のようなポジションにあった水原徳言（1911～2009）は、ミラテスでの販売によって、商品開発に必要な試作費などを生み出そうとしたが、「当時の生活水準に適正な商品を生むことは困難だったから、常に赤字続きで資金難であった」と述べている¹⁴⁾。『スタイル』第1巻第6号のグラビア「特選売場」には、銀座服部のバッグや服飾小物と共に、ミラテスの竹製の「新聞入」や竹皮編の「毛糸入」「くだもの置」が掲載されている。

『スタイル』第1巻第1号（1936年6月号）の巻末には、ミラテスの広告が掲載されている。この広告によると、取り扱う商品は、婦人服用の裂地（ホームспан、人絹、タフタ、絹、クレープ・デシン）広幅銘仙、婦人服用ボタン、日傘、室内装飾用布地、工芸品、家具である。広幅手織り銘仙については、「矢継・井桁等、古来の日本模様をいかしたもの。（服地にご利用をお薦めします）」と記載されている。（図4）

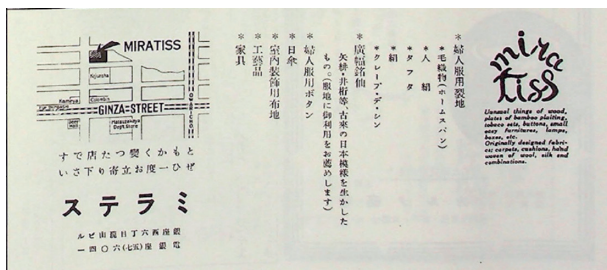


図4 ミラテスの広告
（図版引用『スタイル』第1巻第1号 32頁）

群馬県立近代美術館に所蔵されている、ブルーノ・タウトのデザインによる広幅伊勢崎銘仙の生地見本からは、緋らしさをもつ落ち着いた色調を確認することができる¹⁵⁾。また、伊勢崎銘仙アーカイブスに掲載されている写真によると、広幅銘仙の布幅は91cmであった¹⁶⁾。

②桑野通子が着る第一回「スタイル推薦衣裳」

第1巻第4号（昭和11年9月号）の巻頭グラビアには、松竹大船の女優桑野通子が着用する第一回「スタイル推薦衣裳」が掲載されている。（図5、図6）これは、ミラテスが提供した紺地に白い緋模様の広幅の手織り銘仙を用いたもので、制作は水



図5 桑野通子
（図版引用『スタイル』第1巻第4号 1頁）



図6 桑野通子(バックスタイル)
（図版引用『スタイル』第1巻第4号 40頁）

町洋装店、写真撮影は福田勝治である。編輯後記によると、デザインの考案は、宇野千代と阿部ツヤコで、「この試みはこれからも毎月続けていく考えです。日本のきれを洋服に使ったりクラシックなものを現代的に生かしたり、やって見たいことが沢山あります。これは『お洒落問答』と一緒にスタイル『名物』の一つにしたいと思っています」と記されている¹⁷⁾。巻末にはバックスタイルの写真(図6)と共に、以下のような説明文が掲載されている。

山の別荘のパーティに、お客さまを待つ間のひとときです。布地はミラテス特製の大幅手織銘仙、紺地に白の緋を抜いた純日本風の柄と布地ですが、この異国的な逆効果は、均整のとれたモデルの優美な肢体の線と相俟って、まさに絶品 胸と裾との飾りはオーガンディ、共ぎれのリボンも思いつきではありませんか。スタイル自慢の超特写です。¹⁸⁾

『スタイル』第1巻第3号のグラビア「そあれ」(図7)には、このドレスのヒントとなったと思われるドレスを見ることができる。



図7 『スタイル』第1巻第3号「そあれ」
(図版引用 『スタイル』第1巻第3号 2-3頁)

③小澤静枝による広幅手織り銘仙を用いた2着のアフタヌーン・ドレス

ミラテスの広幅手織り銘仙を用いた二点目は、第1巻第6号(1936年11月号)の巻頭グラビアに掲載されたアフタヌーン・ドレス(図8)で、「スタイル特撮衣裳の第二」と銘打たれている。モデルは舞踏家の崔承喜で、仕立ては銀座クローバの小澤静枝、撮影は名越辰雄¹⁹⁾である。キャプションには、以下のように記されている。



図8 崔承喜
(図版引用 『スタイル』第1巻第3号 1頁)

お稽古がすんで、ちょっとそこまでお散歩に崔承喜さんの颯爽たるお姿です。お召し物は例のスタイル特撮衣裳の第二、紺地に細かい十字緋の広幅手織銘仙でつくった洒落たアフタヌーン。襟もとにとめたうす紫の花束の愛らしさ。²⁰⁾

三点目は、第2巻第1号(1937年1月号)14頁に掲載されている。モデルは松竹少女歌劇からの独立宣言をした江戸川蘭子で、仕立ては二点目と同じくクローバ洋裁店である(図9)。撮影者に関する記載は見当たらないが、編輯後記には、クローバ洋裁店で撮影が行われたと記されている。キャプションは、以下の通りである。

S S Kにボンと辞表を提出して独立宣言の輝かしさに溢れている江戸川蘭子さん、茜色に白黒の日本固有の井桁模様の銘仙のアフタヌーンドレスです。濃いブラウンのコードがギャザーの可愛い○イネックとウエストのバンドにあ○○れてみます。美しい肩の張り具合 ○カートのバックで開いた線の面白 ○タフタのような味わいです。²¹⁾



図9 江戸川蘭子
(図版引用『スタイル』第2巻第1号 14頁)

ここで「タフタのような味わい」と記されていることに注目したい。銘仙は、大正期から昭和戦前期にお洒落着として好まれた素材で独特の光沢感があり、軽くて張りのある風合いである。『スタイル』第1巻第7号で川瀬美子が述べているように、和装用の布地で洋服を仕立てること自体は、以前からなされていたようであるが、縞や緋は用い方が難しいとされていた²²⁾。これは和服用の反物の布幅が狭かったため、柄合わせには、和裁と洋裁に関する知識が求められたためである。ミラテスの広幅手織り銘仙は、タウトの監修のもとでデザインされており、洋服を作ることを想定して91cm幅で製織されていた。制作者の小澤静枝は、第1巻第4号(1936年9月号)の「-日本版- デザイナアの横顔」において、最初に取りあげられており、ジャンヌ・ランバンに匹敵し、パリやニューヨークの社交界の雰囲気そのまま東京に移植する實力を持ち、多くの名流婦人をベスト・ドレッサーにした立役者であり、小澤自身がベスト・ドレッサーであることが第一の強みであると評されている²³⁾。小澤にとって、富裕な有識者や外国人を顧客とするミラテスの主力商品である

広幅手織り銘仙を素材としたドレスの制作は、その力をアピールするよい機会であったと思われる。

第2巻第1号の編輯後記には、「ミラテスの広幅銘仙は大分知れてきたらしい。桑野通子さん以来、今月の江戸川さんで三着目だが、どれもそれぞれ面白い。」と記されている²⁴⁾。

2) マニッシュスタイルのドレス

第1巻第7号の編輯後記には、「今月から、洋装方面の担当者として松井直樹氏が入社した。従来、ともすれば「雰囲気」ばかりの弊があった前半グラビア面に、清新な活気が漂ってゐる筈である」と記されている²⁵⁾。第1巻第7号(1936年12月号)と第2巻第1号(1937年1月号)の巻頭グラビアは、共に、マニッシュタイプのドレスである。

① 紺ベルベットのボレロ型夜会服

第1巻第7号の巻頭グラビアは、クリスマスを意識した紺ベルベットのボレロ型のイヴニング・スーツ(図10)で、「スタイル社特選衣裳の第三」と銘打たれている。製作を担当したのは雲記洋服店である。モデルは純英子(松竹大船)、撮影は名越辰雄であ



図10 純英子
(図版引用『スタイル』第1巻第7号 1頁)

る。キャプションには以下のように記されている。

クリスマス・イヴの帝国ホテル。踊り疲れてバルコンの蔭で一休みしてゐる英子さんの眼眸は明星。堂々たる未来の大スタアの風貌は、グレッタ・ガルボかコルベール、服はスタイル社特選衣裳の第三版、豪華な紺ベルベットのボレロ型の夜会服、ブラウスは白サテンのマンニッシュ・スタイル。幅のせまい共布のネクタイを結んだ意気の心憎さ。²⁶⁾

編集後記には、この「豪奢、華麗なソアレ」は、「雲記洋服店の好意によるもの」²⁷⁾とあり、第6号までとは異なり、ベルベットという高級洋服素材を活かしたデザインであると言えよう。雲記は、宇野千代や阿部ツヤコが最真にしていた洋装店²⁸⁾で、ミラテス同様、『スタイル』第1巻第1号に広告が掲載されている。

②松井直樹デザインのディナー・ドレス

第2巻第1号の巻頭グラビアのドレスは、松井直樹(1901-1963)のデザインによるもので、仕立てはロンモ洋裁店、布地はストック商会である。モデ



図11 霧立のぼる
(図版引用『スタイル』第1巻第3号 1頁)

ルは霧立のぼる、帽子の提供は、ベルモード帽子店であり、撮影は名越辰雄である(図11)。キャプションには以下のように記されている。

新興スタアの霧立のぼるさんのエレガントなディナードレス シルヴァ・ラメと黒サテンの二つの階調をもった流行のマンニッシュ・スタイルです。男の燕尾服を思わせるやうなブレインでシックな扮装。気取った折り返しの衿とピクトリアン風の意気な肩と。黒ヴェルヴェットの鉢巻のやうに大きく結んだイヴニングキャップ。²⁹⁾

ストック商会は、高級洋服素材で知られており、仕立てを担当したロンモ洋裁店の中島要は、藤田嗣治、有島生馬、東郷青児らの力添えを受けており、「一日本版-デザイナーの横報」では「服飾の色彩や線條の美的創造性が頗る芸術的香気」に満ちていると評されている³⁰⁾。松井は、『スタイル』の洋装部門の企画を担当するポジションにあったと思われる、以後、定期的に松井のクレジットの入ったデザインが掲載される。松井は、『スタイル』入社後も本の装丁や挿画の仕事が続けており、『スタイル』の表紙画も手がけている。第2巻第1号の表紙画については、クレジットがないため、推測の域を出ないが、松井が担当した可能性が高いと考える。松井のデザインについては、稿をあらためて論じたい。

3. おわりに

本稿では、創刊から翌年の1月号までの『スタイル』について、グラビアに着目して考察を行った。創刊もない1936年6月28日の読売新聞朝刊に掲載された広告には、「宇野千代編輯のモダングラフ」というコピーがつけられ、「読めるだけで生きてゐるのが嬉しくなる雑誌です。流行のことなら何でもござれ、凡そ現代人の最関心事をすべてグラビアで解決するスバラシさ、小説読物の〇〇は勿論です。」³¹⁾とある。当時のジャーナリズム全体の流れとして、「グラビアで解説する」という傾向があったことは、高橋によって指摘されている³²⁾。第1巻第2号に掲載された『スタイル』初の人物写真の撮影は、当時、人気上昇中の福田勝治で、洋装のモデルを務めた福島慶子は海外生活の経験を持ち、当時一流の芸術家や文化人との交流経験を持つ名流婦人であった。和装のモデルは、深川育ちの宮川静子で

ある。ここに見られる装いは、洋装、和装共に、当時の一般的な日本人の日常の装いとは異なる、非日常的な装いと言えよう。第1巻第2号の表紙には、「お洒落画像」という表記がみられ、お洒落な生活をグラビアで紹介するという『スタイル』の姿勢を読み取ることができる。第1巻第3号からは、和装頁には、芸姑の写真が掲載されるようになり、以後、『スタイル』では、洋装と和装の頁が並列して掲載されるようになる。グラビアに加え、宇野千代という個性に惹かれた多彩な寄稿者によるエッセイや記事によって、『スタイル』は、当時の「和装と洋装の拮抗した状況を、多くのエッセイと画像データに

よって見事に遺すことになった」³³⁾と評されることになる。

一方で、第4号から掲載された「スタイル推薦衣裳」は、ミラテスやストック商会によって、提供された素材を用いた衣裳提案である。特にミラテスの広幅手織銘仙を用いた3着は、当時の工芸デザインにおける伝統工芸の新しい感覚を活かす試みと接点を持つことが確認できた。今後『スタイル』の洋装と和装に関する記事や寄稿者を精査し、当時の生活文化やデザインにおける『スタイル』の位置付けを検討したい。

- 1) 『スタイル』創刊号から第1巻第7号までの誌面の変化については、拙稿「宇野千代編集の雑誌『スタイル』に関する一考察 - 初期の誌面の構成を中心に -」〔山口県立大学学術情報第14号 (国際文化学部紀要 通巻第27号) 2021年、pp95-104.〕において考察した。
- 2) 『読売新聞社』1936年6月28日
- 3) 飯沢耕太郎「『写真作家』の誕生—福田勝治の戦前の活動—」、『写真家/福田勝治展—孤高のモダニスト—』山口県立美術館、1994年、p.183.
- 4) 『スタイル』第1巻第2号、p.29.
- 5) 『写真家/福田勝治展—孤高のモダニスト—』山口県立美術館、1994年、p.26
また、宮川静子をモデルとして撮影された「夏姿・深川娘」「深川の娘」と題された2枚の写真(複写)についても確認することができる。
- 6) 『スタイル』第1巻第2号、p.40.
- 7) 『スタイル』第1巻第3号、p.1
- 8) 『写真家/福田勝治展—孤高のモダニスト—』山口県立美術館、1994年、pp.28-29.
- 9) 『スタイル』第1巻第4号、p.40.
- 10) 『スタイル』第1巻第3号、p.19.
- 11) 入江たか子の和装は鏝木清方風に装ったもので、吉屋信子による「美女讃」が寄せられている。『スタイル』における和装を考えると上で重要な画像である。和装については稿を改めて論じる。
- 12) 井上房一郎(1898-1993) 高崎の大実業家の次男。早稲田大学卒業後パリに遊学し、帰国後、商工省貿易局嘱託となり群馬県立工業試験場の指導者として、高崎を中心に群馬県下の工芸の事業化に努めた。生涯にわたって文化活動に貢献し、戦後は群馬交響楽団、群馬県立近代美術館の設立に関わった。
- 13) 『工芸ニュース』第四巻第10号(『復刻版工芸ニュース 第一期 第四巻』国書刊行会、2013年、p.365) .
- 14) 『ブルーノ・タウトの工芸』LIXIL、2013年、p.34
- 15) 群馬県立近代美術館蔵、『モダンデザインが結ぶ暮らしの夢』Opa Press、2019年、p.31.
- 16) 伊勢崎銘仙アーカイブス <http://iga.justhpb.jp/taut.html> (2022年1月10日閲覧) .
- 17) 『スタイル』第1巻第4号、p.40.
- 18) 『スタイル』第1巻第4号、p.40.
- 19) 三越写真部のチーフカメラマン
- 20) 『スタイル』第1巻第6号、p.1.
- 21) 『スタイル』第2巻第1号、p.14.
- 22) 『スタイル』第1巻第7号、p.19.
- 23) 『スタイル』第1巻第4号、p.13.
- 24) 『スタイル』第2巻第1号、p.44.
- 25) 『スタイル』第1巻第7号、p.32.
松井直樹(1901-1963)は、『スタイル』において洋装を担当すると共に、表紙画など、グラフィック面においても活躍している。第2巻以降の『スタイル』には、松井のデザインが定期的に発表されている。
- 26) 『スタイル』第1巻第7号、p.1.
- 27) 『スタイル』第1巻第7号、p.32.
- 28) 『スタイル』第1巻第1号の「お洒落問答」における、「あなたはどちらの洋服屋さんで洋服をお作りになりますか?」という問いに、宇野千代は「雲記、クローバ、ロンモ」と答えており、阿部ツヤコも「雲記」をあげている。クローバは、ミラテスの広幅銘仙による第2と第3を制作しており、ロンモは、第2巻第1号の松井直樹デザインのラメと黒サテンのドレスの仕立を担当している。(『スタイル』第1巻第1号、pp.20-21) .
- 29) 『スタイル』第2巻第1号、p.1.
- 30) 『スタイル』第1巻第4号、p.13.
- 31) 『読売新聞社』1936年6月28日
- 32) 高橋晴子『近代日本の身装文化』三元社、2005年、p.116.
- 33) 前掲書p.117

表1 『スタイル』創刊号から第2巻第1号までの巻頭グラビア

巻号	発行年月	モデル	撮影者	
第1巻第1号	1936年6月	マレーネ・ディートリッヒ	—	
第1巻第2号	1936年7月	クレア・トレヴァ	—	
第1巻第3号	1936年8月	薩摩 千代子	—	オーガンジーのイブニングドレス (仕立：上野広小路カナメヤ)
第1巻第4号	1936年9月	桑野 通子	福田 勝治	「第一回スタイル推薦衣裳」 デザイン：宇野千代、阿部ツヤコ 生地提供：銀座ミラテス 衣裳製作：赤坂水野洋装店
第1巻第5号	1936年10月	入り江 たか子	名越 辰雄	和装（簞木清方風）
第1巻第6号	1936年11月	崔 承 喜	名越 辰雄	「スタイル特撮衣裳の第二」 生地(銘仙)：銀座ミラテス 裁断仕立：銀座クローバ 小澤静枝 帽子：銀座オリエンタル帽子店
第1巻第7号	1936年12月	純 英子	名越 辰雄	「スタイル社特選衣裳の第三」 製作：雲記洋服店
第2巻第1号	1937年1月号	霧立 のぼる	名越 辰雄	デザイン：松井直樹 仕立：ロンモ洋装店 布地：ストック商会 帽子：ベルモード婦人帽子店